

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：27301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370702

研究課題名(和文) 英語を活用した大学生の地域貢献活動が地域の異文化共生にもたらす効果

研究課題名(英文) Service-Learning That Requires English Skills Practiced by University Students and Its Effects on the Development of Intercultural Relations in the Community

研究代表者

山崎 祐一 (YAMASAKI, YUICHI)

長崎県立大学・経営学部・教授

研究者番号：50259735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後、英語やアメリカ文化とともに発展してきた長崎県佐世保市をフィールドとして、大学生たちが英語を活用しながら産学連携や国際交流を通して地域貢献活動に参加することが、地域の異文化共生や彼らの英語学習に対する意欲の向上につながるかどうかを検証することを主要な目的とした。地域とリンクしたインターアクションを中心とするコミュニケーションの体験的学習と、その経験の中から培われる英語運用能力の習得を組み合わせることは、異文化共生に不可欠な文化相対主義や複眼的視野を獲得し、国際的な素養を持ち地域に貢献できる人材を育成するには非常に効果的な方法の一つであることが確認された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to demonstrate that service-learning projects undertaken by Japanese university students in the city of Sasebo using their English skills through industry-academia collaboration and international exchange could help develop intercultural relations in the community and enhance their motivation for studying English. The research confirmed that combining community experience-based learning of communication through interaction, together with English competence improved through their experiences, was an effective way to acquire ethnorelativism. In addition, the project encouraged multilateral viewpoints necessary for developing intercultural relations and also fostered human resources equipped with global awareness that are ready to contribute to the community.

研究分野：英語教育

キーワード：英語教育 異文化間コミュニケーション 地域貢献 サービスラーニング 異文化共生

1. 研究開始当初の背景

長崎県佐世保市にある長崎県立大学では、経済学部にて英語プログラムを新設するなど、「実践力のあるグローバル人材の育成」や「国際的な素養を持ち、地域に貢献できる人材の育成」に取り組んでいる。大学生が教室で学んだ英語を、地域に発信・還元し、その体験を通して得た知見を、再度大学の英語学習分野にフィードバックするという「サービ斯拉ーニング」を展開している。Sigmon(1994)は、サービ斯拉ーニングを「Reciprocal Learning(相互学習)を基礎とした経験的教育アプローチ」、つまり、サービスを提供する側と受ける側の両方が、「経験から学習する」ことであると定義している。また、天野(2012)は、コミュニケーションの障害として、「言葉の壁」だけではなく「ネットワークの壁」の存在について言及している。近年、英語力を測るために、語学試験の成績だけにその判断基準を求める傾向にあるが、異文化共生に関わる地域貢献では、自分と相手の立場を正しく深く理解し、英語力を実践の中で通用する戦略的なコミュニケーションスキルへと転換していくことができるかが重要な鍵とも言える。そこで本学では、例えば、市内のアメリカンスクールや米海軍基地内大学と連携して、異文化理解教育や日本語教育を支援し、それらから学んだことを自分の英語学習の分野に持ち帰りさらに学び、それをまた地域の小中学校での外国語活動や英語教育の支援に還元するなど、円循環式の学習活動に取り組んでいる。また、昨年度より、佐世保商工会議所との相互協力体制のもと、佐世保市内の日米異文化共生と街の経済の活性化を主眼に、本学学生の地域貢献と産学連携の活動と調査に継続的に取り組んでいる。この取組を始めるに至った背景には、同市には米海軍基地が中心街に隣接し、多くのアメリカ人が基地内外に生活しており、アメリカ人客が頻繁に外食や買い物などで商店街に出かけるという事実がある。ところが、商店街からは、英語での接客、文化のルールや礼儀の違い、支払いに関するトラブルなど、アメリカ人客の対応に非常に苦労しているという実情がある。そこで昨年度、「住みよい街づくり」と「街の経済の活性化」を目的に、市内在住のアメリカ人に対し、『外国人消費動向調査』を実施し、276人から得られた回答をもとに集計結果を公表した。その集計結果から、異文化での生活やコミュニケーションに関する事象を抽出、分析し、それをもとに佐世保市民がアメリカ人客の対応に活用するための『英語接客表現集』を作成し、市内商店街を中心に約150部を無料配布した。また、過去約2年半の間、市内の無料雑誌に週1回異文化理解と英語表現に関するコラムを継続的に掲

載し、メディアでは、テレビ局、新聞社3社に取り上げられた。今後はそれぞれの業種特有の英語コミュニケーションの悩みや問題点を聞き取り調査し、市民に役立つためにさらに改善していく計画であり、大学が日米のコミュニケーションの橋渡しになるという意味で、地域の商店街も本学の持つ可能性に大きな期待を寄せている。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、グローバル人材の育成の一環として取り組んでいる大学生の英語を活用した地域貢献活動が、地域の異文化共生にもたらす効果について検証することである。具体的には、米海軍基地との共存を余儀なくされ、歴史的にアメリカ文化が混在する長崎県佐世保市における商店街、及び地域の人々の外国人とのコミュニケーションや英語学習に対する意識の変容や英語による対応の向上を追究し、その活動の実践が「住みよい街づくり」や「街の経済の活性化」にどのような影響を与えるかを検証する。活動後にフィードバックとして得られる地域の人々と外国人居住者双方の意見や、国内外での事例を参考に、地域における異文化共生のさらなる課題を明らかにし、その有効な解決法を検討する。

3. 研究の方法

本研究では、大学が地域と連携し、長崎県佐世保市における日米異文化共生とアメリカ人客の消費活動に関する意識調査を行い、日米双方の実態を精査し、「住みよい街づくり」や「街の経済の活性化」につながる要素を抽出・分類し、分析を行うとともに、地域貢献に参加する大学生の英語運用能力を向上させるために、佐世保市の地域性を活かしたサービ斯拉ーニングを実施する。業種別に細分化し、『英語接客表現集』を作成、無料配布し、市内商店街関係者の英語コミュニケーションに対する意識の向上を図るとともに、異文化共生に対する意識や集客の変容を検証する。『英語接客チェックシート』を作成、業種別に問題点を分析し、「モノ」と「ヒト」についてアメリカ人客対応の環境を整える。各店舗の特徴や、マナーやシステムの違いなどを英語表記して『ガイド』にまとめ、よりきめ細やかな接客・対応ができるようにする。国内外での事例研究を佐世保市における異文化共存の国際化に役立てながら、街の経済の活性化の実現を検証する。

4. 研究成果

(1) 産学連携を通じた英語学習に関連する地域貢献としての成果と地域への還元
大学生が地域と協働し英語を活用しながら地域貢献活動の継続的な取組を通して、本研究を地域における異文化共生の促進に役

立て、かつ大学生が持つ英語力を戦略的なコミュニケーションスキルに転換する礎を築くため、産学連携という形で、佐世保商工会議所と密接に連携し研究活動を実施した。歴史的にアメリカ文化が混在し、米海軍基地との共存を余儀なくされている長崎県佐世保市にとって、異文化共生は様々な分野で必要性を感じるものであり、また乗り越えなければならない高いハードルでもある。それを一つひとつ地道にクリアする努力の一環として、外国人客来店支援事業に取り組んだ。市内の店舗が外国人客に対して英語で対応可能かどうかを見極めるため、ホテル、飲食店、小売店などについて、想定される外国人客からの質問内容を、大学生と英語で文章化し、それぞれ業種別に事前調査用紙を作成した。その調査用紙をもとに、グループごとに各店舗を実際に訪問、英語でインタビューをするという形式で英語対応の確認調査を実施した。その結果、英語対応可能な店舗を50店舗、70店舗、100店舗と3年間で段階的に決定し、「フレンドシップ店」として認可、店頭はそのプレートを英語表記で掲げ、外国人客の集客に役立てる基盤を作り、彼らが来店しやすい環境づくりをした。その間、外国人客来店の際の広報活動を実施、学生たちは外国人客へのフライヤーを街頭で配布するとともに、その内容を英語で詳しく説明する活動に参加することにより、さらに英語を身近で意味のある学習(Meaningful Learning)につなぐことができた。また、本学が存在する佐世保市という地を十分に理解し、大学生の地域貢献活動をアメリカ文化や外国語としての英語教育の分野にも役立たせ、地域の異文化共生に寄与する研究や活動も実践した。この地域貢献活動を通して得られた、大学生に対する教育的成果としては、発信するには、国際語としての英語力のほかに、即戦力の裏付けとなる基礎力や考え方が必要であることや文化背景を異にした他者と上手くコミュニケーションを図る柔軟性や思考力、積極的かつ協調的に他者と関わるコミュニケーション能力、価値観や背景の違いを冷静に考えられる複眼的思考が身についたこと、俯瞰的視点で地域社会を眺めながら、しなやかな感性と行動力で世界を知る力を持つことの必要性への気づき等が、事後の活動参加学生に対するアンケート調査から確認された。

(2) 地域の異文化共生に役立たせる「Friendship Business Guide」の作成

産学連携による取組については、商工会議所の担当責任者と緊密に連絡を取り合い、研究活動内容について協議、かつ、地域連携では非常に重要な産学双方の信頼関係を樹立、維持することができた。佐世保の地域にまだなじみのないアメリカ人に対しても、異文化共生に役立つことができるよう、外国人客に対しての情報発信として、各店舗を訪問しそれぞれの店舗に関する情報を入手後、それを

英語に翻訳し、英語でのマップとガイドを作成した。それとともに、「マップ」に合わせた各店舗の特徴やマナーやシステムなどにおける文化の違いを英語で解説した「Friendship Business Guide」(全45ページ)を、毎年段階的に新たな情報を追加しながら合計3種類作成、それぞれ約1500部を無料配布し、さらなる地域密着を図った。この研究については、米海軍基地司令官からも理解を得ており、基地内においても当局の許可を受けた上で無用配布した。本研究の主要なテーマのひとつである「異文化共生」に関しては、トラブルとして発生している内容や日本の習慣を外国人客に理解してもらえよう、ガイドの中に「Useful Tips to Better Understand Japanese Business Practices (日本の商慣習をよりよく理解するための情報)」を英語で作成した。それに加え、最終版では「Useful Japanese Phrases for Travelers(旅行者のための役立つ日本語フレーズ集)」を作成し、外国人客のための日本語への親しみと円滑な異文化間コミュニケーションの実現の手助けとした。

(3) 「街の経済の活性化」につながる取組の実質的効果

米海軍基地が佐世保市中心街に隣接し、約6,000人のアメリカ人が基地内外で生活しており、アメリカ人客が外食や買い物などで頻りに商店街に出かけるという事実が調査によって明らかになった。ところが、商店街側への聞き取り調査で、英語での接客、文化のルールや礼儀の違い、支払いなどシステムに関するトラブルなど、アメリカ人客の対応に非常に苦労しているという実情があることが分かった。しかし、そのような問題を抱えながらも、市内の商店街からは、アメリカ人の集客が、街の経済の活性化や地域における異文化共生につながるという声が上がっているのもまた事実である。この取組の実質的効果を検証するため、店舗のアメリカ人集客の変化についての調査を実施した。これに関する調査期間は1年間であったが、「フレンドシップ店」として認定した約7割の店舗で、増加の幅の差はあったものの、集客の伸びが確認された。しかしながら、集客の増加が得られなかった店舗もあるという課題も残った。その後、各店舗で実施した聞き取り調査で、「フレンドシップ店」のプレートの設置位置や店頭、店内の英語表記などに、その原因が見出された。それらの店舗に対しては、集客力向上と英語による対応改善のための新たな提案や指導を試みた。

(4) 大学生の異文化間コミュニケーション能力の向上

Byram(1997)は、異文化間コミュニケーション能力の概念の定義として、「目標言語がコミュニケーションの主要な言語である活動に参加する知識や技術や能力」を挙げてい

る。本学で「英語」を学ぶ「経済学部」の学生が、この地域貢献活動に参加しながら、地域の「経済」の活性化の問題と異文化理解を含む「英語」学習に同時に取り組むことによって、「経済」という専門分野と「英語」という語学分野の両方に役立てた。地域貢献活動とその経験の中から培われる英語運用能力の習得を組み合わせることにより、「国際的な素養を持ち、地域に貢献できる人材の育成」にもつなぐことができるように努めた。約8割の活動参加学生が、活動後のアンケートの中で、英語を活用して地域で活動することの意義を感じており、自分たちの地域に対する責任感や、「知識」と「技術」は実際に活動に参加することを通して、行動や表現の内面にあるものを感じ取り、理解する力と結びついて初めて活かされることについて述べている。Krashen(1982)は、“Fluency in second language performance is due to what we have acquired, not what we have learned.”と述べているが、大学生たちは、英語習得には、座学だけではなく、インターアクションをとおしたコミュニケーションの体験的訓練が必要であることに触れている。また、活動に参加したことによって、英会話力不足、不得意分野（発音など）を自覚し、それが学ぶ意欲につながり、結果的に地域の信頼関係や日米友好親善に役立てることができたことにも言及している。コミュニケーションに対する積極的な姿勢、英語の発音の習得の必要性、ソーシャルスキルの重要性、自文化を英語で発信することの大切さの認識などが、主要な成長の項目として挙げられている。知識だけではなく、自立する人づくり、自分ができないといけないという責任感、体験（トライアルアンドエラー）による自立的学習の動機づけなど、自立心と向上心、人格形成にも有益であったことについて述べている。

（５）地域のアメリカンスクールにおけるサービスラーニングの取組

本研究では、大学生が英語と異文化を異文化間コミュニケーションの両輪として学びながら、地域における異文化共生や国際交流に貢献し、そこから得られた知見を自分の英語学習にフィードバックし、それを再び地域に還元し、この学習プロセスを円循環的に展開するサービスラーニングを実践してきた。サービスラーニングは、「Reciprocal Learning（相互学習）を基礎とした経験的教育アプローチ」（Sigmon 1994）、つまり、サービスを提供する側と受ける側の両方が「経験から学習する」ことができる。近年、英語力を測るために、語学試験の成績だけにその判断基準を求める傾向にあるが、本取組である異文化共生に関わる地域貢献では、自分と相手の立場を正しく深く理解し、英語力を実践の中で通用する戦略的なコミュニケーションスキルへと転換していくことも大きな

目的としてきた。地域の異文化共生に関する取組については、地域の英語教育分野にも研究活動の場を広げ、佐世保市内の公立小学校とアメリカンスクールとの国際交流における大学生のサービスラーニングを実施した。国際交流では、大学生は小学生の英語プレゼンテーションの事前指導、英語での応対、通訳など、英語を活用しながら地域における異文化共生の一翼を担った。市内のアメリカンスクールの異文化理解学習では、学生たちが英語を活用しながら日本文化を発信するサービスラーニングを継続的に実践し、地域の日米異文化共生の促進に寄与してきた。また、小学校外国語活動の一環として行われている日米小学校の国際交流では通訳の役割を担うまでになった。学生たちへの事後アンケートでは、本活動を通して、言葉の背後にある文化が言葉と不可分であることに気づいたという意見が多数あり、英語学習や異文化間コミュニケーションに対する意識改革にも大きくつながった。

（６）外国人客の異文化体験を通じた地域への親しみと理解を「街の経済の活性化」につなぐ取組

大学生のこれまでの産学連携の取組をもとに、さらに内容を幅広く展開する「Sasebo Omotenashi Tour」を企画した。この取組は、本研究期間に完了することができなかったが、現在も継続的に実施しており、これまでのサービスラーニングが基盤となる地域貢献の成果として捉えている。一般的な地域の名所案内ではなく、外国人客に異文化体験を通して生活の中で地域について理解を深めてもらい、そのことが、異文化共生と街の経済の活性化にもたらすさらなる効果を検証しようというものである。店舗等を直接訪問することによって、地域文化の特徴や生活習慣について学んでもらうと同時に、大学生が自文化を積極的に発信することの大切さを確認する機会にもなる。これに関しては、英語教育の一環として、大学生とともに英語と日本語でフライヤーをすでに作成しており、大学生が通訳として同行する計画である。大学生たちは、国際交流等での通訳経験を活かしながら、これまでに得られた英語の知識を、実践的なコミュニケーションスキルに転換する機会を得ることができ、さらに実践力のある人材づくりに役立てることが期待できる。

（７）発信型コミュニケーションを重視した海外サービスラーニングへの展開

大学生がこれまで英語を活用した地域貢献活動で培ってきた異文化間コミュニケーション能力を基盤に、海外もひとつの地域として捉え、異文化共生を主要なテーマに、活動を学外から海外へ展開した。この取組においては、「海外の外国語教育と異文化理解に貢献」「自文化について世界に発信」

「海外での日本語・日本文化学習の動機づけ」「英語学習や国際交流に関する意識の向上」をコンセプトとした。活動サイトとしては、アメリカ合衆国ハワイ州の University of Hawaii, Kapiolani Community College と Waialae Elementary Public Charter School の協力を得ながら、現地で長崎県と佐世保市について英語でプレゼンテーションを実施した。国内におけるサービラーニング活動で、英語習得にはインターアクションや意味交渉を通じたコミュニケーションの体験的訓練が必要であることを感じている学生たちが、海外の異文化間コミュニケーションの実践の現場で、活動に参加する知識や技術や能力を発揮できるかどうかを確認する機会とした。大学生たちは、日本語教育と異文化理解教育の分野で、指導補助をするサービラーニングを実践した。参加学生たちは帰国後のアンケート調査の中で、国際語として最も強い通用力を持つ英語による発信の重要性、異文化を容認する柔軟性、文化は対等であることを再認識したことなど、円滑な異文化間コミュニケーションの実現に不可欠な要素への気づきについて述べている。メディアでは新聞社とテレビ局、それぞれ数社から取材を受け、新聞に9回掲載、テレビでは4回放映されるなど(うちNHK総合では全国放送) 地域への情報発信の努力も怠らないようにした。また、現地で、佐世保市で展開しているサービラーニングの実績についてプレゼンテーションをすることにより、国外にも成果を公表した。

(8) 異文化共生と英語学習に役立たせるための英語フレーズ集の作成

申請者は、本研究期間、佐世保市における英語学習と異文化理解に関する大学生の地域貢献とその有効性について分析を行い、論文等を通して発表してきた。それらの研究結果から得られた知見をもとに、本研究では地域貢献が日本人とアメリカ人が共生する社会の実現にどのように役立つのか、その過程とそこにあるニーズや問題点について追究してきた。日米間の異文化共生は佐世保市民にとって生活の延長上にある切実な問題であり、「街の中での異文化の出会い」には、言葉とともに文化のマナーやルールの理解が深く関わってくる。それらを認知・容認することの重要性をさらに掘り下げながら、地域の異文化共生に何が必要なのかを考察してきた。また、言語的側面から言えば、実際の大学生たちによる異文化間の地域貢献の現場では、例えば、学校の教科書には現れない英語の語彙や表現が数多く使用され、それらの習得とともに、リスニング力と発音力の向上が円滑なコミュニケーションの実現につながった。これらのことを踏まえ、大学生たちが地域貢献活動の中で、英語を有効に活用し、自信を持ってインターアクションができる手助けとなることを目的とした図書を

執筆、全国出版した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

山崎祐一「異文化理解の要素を取り入れた小学校外国語活動の実践～子どもたちはどのようにしたら英語に興味を持つのか～」『比較文化研究』第113号、2014年10月

[学会発表](計7件)

山崎祐一「文化の比較を通じた英語学習の実践」第36回日本比較文化学会国際学術大会、北九州国際会議場、2014年6月13日

山崎祐一「体験学習を通じた小学校外国語活動と国際交流」第22回日本児童英語教育学会九州沖縄支部研究大会、久留米大学福岡サテライト、2014年10月26日

山崎祐一「産学連携による地域の異文化共生をテーマにした経験的英語教育の試み」第27回日本比較文化学会九州支部大会、福岡女子大学、2015年3月7日

山崎祐一「大学生の英語学習を地域の異文化共生に役立たせるサービラーニングの実践」第37回日本比較文化学会国際学術大会、創価大学、2015年6月13日

山崎祐一「発信力に力点を置いた英語教育の実践～英語の知識を戦略的なコミュニケーションスキルにどう結び付けるのか～」第38回日本比較文化学会国際学術大会、弘前学院大学、2016年5月21日

山崎祐一「地域にリンクした英語教育(外国語活動)と異文化間コミュニケーションの実践に関する研究～英語を使って、いったい何ができるようになるのか～」第36回日本比較文化学会国際学術大会、静岡県立大学、2017年5月20日

山崎祐一「地域連携による「英語で交わる街づくり」の活動を通じた異文化共生と市民の英語力改善の取組」第30回日本比較文化学会九州支部大会、アクロス福岡、2018年3月3日

[図書](計9件)

山崎祐一『世界一やさしい すぐに使える英会話超ミニフレーズ300』Jリサーチ出版、2014年4月10日

八尋春海、山崎祐一『スタンド・バイ・

ミー』フォーインスクリーンプレイ事業部、2014年7月25日

山崎祐一 『誰でもカンタン・こんなに通じる！英会話超ミニフレーズ大特訓』Jリサーチ出版、2015年2月10日

高瀬文広・山崎祐一 『English Delight of Movie English and TOEIC』ミネルヴァ書房、2015年4月20日

山崎祐一 『ああ言えばこう言う すぐに使える英会話 対話ミニフレーズ 300』Jリサーチ出版、2015年12月10日

山崎祐一 『ネイティブが1番よく使う英会話』Jリサーチ出版、2016年4月10日

山崎祐一 『先生のための 授業で1番よく使う英会話』Jリサーチ出版、2017年8月10日

影浦攻・山崎祐一 『これならできる！小学校英語ハンドブック』新興出版社啓林館、2016年4月10日

山崎祐一 『訪日外国人の Help! に応える とっさの英会話大特訓』Jリサーチ出版、2017年12月10日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 祐一 (YAMASAKI YUICHI)

長崎県立大学・経営学部・教授

研究者番号：50259735